

<原著>

在宅療養高齢者のスピリチュアリティの体験

鈴木美代子

岩手県立大学看護学部

要旨

本研究の目的は、在宅療養高齢者のスピリチュアリティの体験を記述することにより、体験の意味とその構造を明らかにすることである。在宅で暮らす後期高齢者4名に非構成的面接を行い、Parseの人間生成理論を援用し質的記述的に分析を行った。

その結果、〔ある対象につながりを求め、その関係性から意味を構成する〕〔生き方から築いた力を働かせ、意味や目的に向かって進もうとしている〕〔言語で語ることで、関係性や意味を確認している〕の3つの中心的テーマが見出された。在宅療養高齢者は言語化することをとおして、自らの体験を具現化し意味の再構成を図っていた。高齢者のスピリチュアリティの体験の意味には2つの過程があると考えられた。1つは、ある対象との関係性を模索しながら意味の構成を図る「模索的探求過程」で、特に後期高齢者は自分を越えた大きな存在との関係において人生の統合という課題に向き合っていたと解釈された。2つは、意味や目的に向かって生き方から築いた力を働かせ進もうとする「動的探求過程」で、在宅療養高齢者は、住み慣れた生活環境の中で所以の力強さが感じられ、この2つの探求過程を理解した看護ケアの重要性が示唆された。

キーワード：在宅療養，スピリチュアリティ，人間生成理論，後期高齢者

はじめに

2005年に世界に先駆け超高齢社会に突入したわが国の2010年の平均寿命は、男性79.64歳、女性86.39歳で、高齢化率は23.3%（2011年）と上昇し続けている。このうち75歳以上の人口の割合は11.5%と増加しており、今後も「団塊世代」の高齢化に相俟って増加は続き、2042年にはピークをむかえると推計されている¹⁾。今後ますます増加・長期化が見込まれる「後期高齢者医療の在り方に関する基本的考え」としてまとめた報告書²⁾によると、生活を重視した在宅医療が重要で、そのためには看護や介護などの連携を図り一体的なサービス提供のもとに、個々に配慮した安らかな終末期を迎えるための医療体制が求められている。

高齢者といっても、65歳から100歳を超える幅広い年齢層を含んでおり、老年期の健康課題にかかわる加齢変化や健康水準は実に個人差が大きい上に、生活・療養の場も医療・保健・福祉関連施設や、在宅、地域社会など多岐にわたる。高齢者の健康支援は、このような個人の特性と発達課題をふまえ、高齢者が主体的に成長し続ける存在であることを認識し、自らの終焉

を見据えながらも最期まで自分らしく生きていけるよう、自立・自律した日常の生活機能とQOL（Quality of Life）の維持・向上を支える看護実践が重要となる³⁾。老年期の発達課題にはEriksonが表した「統合と絶望」があるが、この課題の達成には、老いにおけるスピリチュアルな作業が必要であるといわれる⁴⁾。そのためには、身体面・精神面だけではなく社会文化的背景に依拠した価値や信念と深く関わるスピリチュアルな側面を理解した援助が重要となる⁵⁾。

スピリチュアリティ（spirituality）は、健康に関連する因子として、1980年代より欧米のホスピスケアや緩和医療領域でQOL概念とともに発展してきた概念である。1990年に世界保健機関（以下、WHO）が、「身体的・心理的・社会的因子を包含した人間の“生”の全体像を構成する一因とみることができ、生きている意味や目的について関心や懸念に関わっていることが多い⁶⁾」と言及し、その後の健康定義改正案の論議（1998年）以降、注目が高まった。スピリチュアリティは、全ての人間に備わる普遍的本質としてあり、病気や老化、衰え、喪失、痛みや死など人生の危機に直

面したときに意識化され、加齢とともに高まる特徴がある⁷⁾⁻⁸⁾。しかし、国内のスピリチュアリティに関する高齢者を対象とした看護研究は、多くが概念や構成要素を探索するもので、これらの概観から「意味、価値、関係性、超越性」⁹⁾⁻¹⁰⁾などが共通の構成概念として報告されているが、現在もそれらの関係性や構造について十分なコンセンサスは得られていない。

そこで本研究の目的は、在宅療養高齢者が体験するスピリチュアリティの意味を、語りの記述をもとに探索することとした。特に、今後も増加が見込まれる在宅療養中の後期高齢者に着目し、その意味と構造を明らかにすることで、在宅療養高齢者の健康を支える看護ケアへの示唆を得ることができると考える。

用語の定義

スピリチュアリティとは、全ての人間が共通にもつ生命の根源であり、自らの生きる意味や目的、存在意義を求める欲求やその意識とする。

研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、在宅療養高齢者が体験しているスピリチュアリティに関する語りの記述をもとに、Parseの人間生成理論¹¹⁾⁻¹³⁾を援用し体験の意味について探索する質的記述的研究とした。

2. 理論的背景

Parseの人間生成理論は、Martin Heideggerらの実存主義的現象学とMartha Elizabeth Rogersの看護概念モデル (Unitary Human Being) を哲学的基盤におき、人間は部分の総体以上の統一体としてあり、人間-健康-環境の絶え間なく開かれた世界との間で主体的に相互構成しながら生きる存在ととらえる¹⁴⁾。Parseの方法論は、人間の普遍的な経験の意味を現象学的解釈から探索する方法である¹⁵⁾⁻¹⁶⁾が、現象学の「他の質的研究方法とは少し異なる現象学的・解釈論的方法であり、個人の体験の記述が人間生成理論の枠組みに基づいて解釈される」¹⁷⁾。

本研究がテーマとするスピリチュアリティは、全ての人間に備わる普遍的な本質でありながら、個人の文化的背景に由来する考えや感性、生活実感、価値観などに基づく個別的特殊性と、さらには時間や空間を超越した観念や信念などに関連した多次的側面を有する概念ととらえることができる。こうした概念特性に加え、参加者の膨大な過去の人生経験に依拠したスピリ

チュアリティの体験の意味を理解するには、高齢者のありのままの体験世界の記述をとおして現象の意味を探索することが重要であると考えた。また、人間生成理論の概念枠組みを成す3つの原理「意味の構成」「関係性」「超越性」は、これまで先行研究において明らかになっているスピリチュアリティの構成概念と一致しており、本研究が定義づけたスピリチュアリティの「意味・目的の探索」は人間生成理論のCore conceptにおかれている¹⁸⁾。このことから、在宅療養高齢者が体験しているスピリチュアリティの意味を、人間生成理論を援用することで、概念構成やその関連について探究できるのではないと考えこの理論を選択した。

3. 参加者

A県に所在する2つの病院に、病気や老化が原因で通いながら自宅で生活する高齢者で、明らかな認知機能の低下がなく自らの体験について言葉やシンボル、音楽、絵画、写真などの文化的・歴史的的事象などで表現することができ、参加への同意が得られた後期高齢者とした。

4. データ収集方法

基本的にデータ収集と分析方法は、Parseの研究手法¹⁹⁾の3段階の過程で行った。

第1段階の対話的関与 (dialogical engagement) は、データ収集の過程である。研究者は参加者と真に在ろうとする対話の形成につとめ、参加者との対面的な時間の共有から主体的に表現される生きられた体験に焦点を当てた。最初の面接では「あなたのこれまでのご体験についてお聴かせください」から始め、研究者は構成的な誘導はしないが、高齢者のスピリチュアルケアの対話内容として青木²⁰⁾が示した、(1) 写真や思い出の品物について語り合う、(2) 対象者の過去の体験や思い出について語り合う、(3) 自然や四季のうつろいについて語り合う、(4) 家族や親しい友人について語り合う、(5) 人生の生き方について聴く、(6) 音楽や絵と一緒に鑑賞しながら感想を話し合うを参考にした。繰り返し語られる内容やテーマに関する体験の意味については、次回対話で参加者に確認し、経過に伴い変化する参加者の思考や認識も重要なデータとして収集した。会話の内容は参加者の同意を得て録音し、逐語録とフィールド・ノートを作成した。

調査期間は、2005年5月13日～11月9日であった。

5. 分析方法

第2段階の抽出-統合 (extractive-synthesis) は、分析の過程である。以下 (1) - (4) の手順にそって

実施した。(1) 対話ごとに記録された体験の全体的記述を精読し、本質的な意味と思われる場面に分けた。(2) 場面の本質 (essence) を参加者の言葉で抽出し、研究者の言葉で置き換えた。(3) 参加者ごとに抽出された本質から、命題 (proposition) を導き出した。(4) 全参加者の命題から、中心概念 (core concept) を統合した。

第3段階は、人間生成の原理 (意味の構成、関係性、超越性) と構成概念に沿って、構造的転換 (structural transposition) と概念的統合 (conceptual integration) をとおして現象の理解を深め人間の体験について知識を広める過程である^{21) - 22)}。具体的に、統合された中心概念を人間生成の「第1原理：多次元的に意味を構成することは、価値づけることやイメージすることを言語化することによって現実を共に創造する」「第2原理：リズムカルな関係性のパターンは、総合的一分離的・明示的-隠蔽的・促進的-概念的の逆説的統一性を生きることである。第3原理：可能性をもって共に超越することは、変容する過程でユニークな創生の仕方に力を与えることである」の原理構造に照らし、各々を構成する下位概念 (下線) に転換しそれらを統合した。

さらに本研究では、得られた結果が理論枠組みに局限した内容にならないよう知見の一般化を目指した。解釈した結果を再度記述データに振り返り、抽出された本質の意味とそれらの関係性の一貫性を確認しながら、最終的に在宅療養高齢者が体験するスピリチュアリティの本質的な意味を示すと思われる中心的テーマを導き出した。

6. 信頼性の確保

実施にあたっては、可能な限り真実性の確保²³⁾に努めるとともに、分析・解釈の過程では、研究者の私的主観に陥らないように、適宜、逐語録とフィールド・ノートを2名のスーパーバイザーに提示しテーマの妥当性を確認した。また、解釈学的現象学では分析と解釈が同時に進行するが、不明な点は次の対話で参加者に確認し意味の相互主観化と共同主観化を図りながら行った。

7. 倫理的配慮

医療施設から紹介を受けた参加者には、研究者が書面および口頭で研究趣旨と研究参加への任意性、いずれの時点でも拒否可能であること、拒否しても不利益がないことを説明した。加えて、プライバシーと匿名性の厳守、得られた情報は研究目的以外に使用しない

こと、成果公表の際にも保証されることを説明し同意を得た。スピリチュアリティという言葉が捉えにくい上に参加者の内的心情に入り込むことをふまえ、身体的変化には留意して行った。本研究は、岩手県立大学大学院看護学研究科の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

結果

1. 参加者の概要

本研究の参加者は4名で、その概要を表1に示した。内訳は、男女各2名で、年代は70代後半～80代前半で、全員が家族と同居していた。面接場所は、主に参加者の自宅居間で、通院時には病院の面談室で行った。1回の面接時間は40～120分で、1名に対して3～5回実施した。

2. 抽出-統合の結果

全参加者から得られた対話の場面は89に分けられ、そこから本質28と命題16が抽出され、最終的に3つの中心概念に統合することができた。以下、中心概念を【 】に表し、参加者の語り記述から抽出された本質を〈 〉で示し、研究者の言葉を()に補足した。さらに【中心概念1】は、参加者が意味を見出していた関係性の対象領域として、3つのカテゴリーにまとめられたため、《 》にそのカテゴリー名を表し説明を加えた。

1) 中心概念1：【ある対象につながりを求め、その関係性から意味を見出していた】

参加者は、病気や老いによる身体の衰えや配偶者との死別を体験する中で、これまで築いてきた生きる意味や目的に揺るぎが生じていたが、ある対象との関係性を模索しながらそこに意味を見出していた。

A氏：「最初はこんでは、もう…人生終わりだと思ったんだ。後はもうだめだと思って、本当に辛い…辛いときあったな…。これだけは何ともならないんだもん。何ぼ泣いて悔やんだってね。もとに戻らないから」「出来ると思って退院してきたら、やっぱり実際考えていたのとは違ってた。〈病気の再発〉」

「昨日のデイサービスなんか、どうなんだ？このおばあさんいくらなんだと思ったら、今ちょっとで100になるって言ってたけど〈百歳高齢者との交流〉、この歳で…ほんでもやっぱりまだこうして丈夫にいるんだと思ったら、俺なんかまだ80ぐらいなもので、もう少し強く思って生きてかないとうんと効果ないなと思って。〈強い気持ちで生きる〉」

表1. 参加者の概要と分析結果

性別 年代	病名	回数 時間	場面数 本質数	〈本質〉から統合された命題	命題から統合された中心概念	見出された中心的テーマ
A氏 男性 80歳代 前半	脳梗塞 再々発	5回 380分	場面25 ↓ 本質7	1) 〈自然環境の美しい故郷〉で、一家の主として農家の仕事を続けるという〈役割存続への意志〉を示していた 2) 退院後、思うように動けない身体に落胆していたが、デイサービスで出会った〈百歳高齢者との交流〉から、〈強い気持ちで生きる〉と、いつか〈出来るという希望〉を見出していた 3) これまでやってきたように〈強い決意〉をもって、目標に向かって進んでいこうとしていた 4) 同じ立場にあるディサービス仲間との、〈語り合いが心をつなぐ〉と考えていた	中心概念1: 【ある対象につながるを求めその関係性から意味を構成する】	【ある対象につながるを求め、その関係性から意味を構成する】 「模索的探求過程」
B氏 男性 70歳代 後半	パーキンソン病	3回 300分	場面20 ↓ 本質7	1) 〈宗教家との出会い〉により〈観念的な宗教〉への強い信仰を抱き今も〈心の支え〉として意味づけていた 2) 自らの老いや死について、どのように〈現実的な自己受容〉していくかを模索していた 3) 常に〈自己実現への問い〉ながら、〈感謝の気持ち〉をもって生きていきたいと再確認していた 4) 今の自分の状況を、心から分かってもらえる〈理解者と語り合うよろこび〉が示された	中心概念2: 【生き方から築いた力を働かせ、意味や目的に向かって進もうとしていた】	「動的探求過程」
C氏 女性 70歳代 後半	脳梗塞 後遺症	5回 490分	場面25 ↓ 本質7	1) 辛いときは夜空の〈星の輝き〉を眺め〈明日への希望〉を見出してきたが、そこには常に〈前向きな志向性〉をもって乗り越えてきた 2) 苦難生活を乗り越えてきた体験から、〈家族の絆〉が得られそれを〈掛け替えない宝物〉と意味づけていた 3) 〈家族の役割意識〉をもって生きていることに、幸福感をいただいていた 4) 必ず毎日他者と語る機会をつくり〈笑い語り〉が健康をつくる健康のバロメーターと考えていた	中心概念3: 【言語や態度で語ることで、意味や目的を確認し方向性を見出していた】	【言語で語ることで、関係性や意味を確認している】
D氏 女性 70歳代 後半	くも膜下出血後	3回 250分	場面19 ↓ 本質8	1) 〈亡き配偶者の存在〉を〈いつもそばに居る存在〉と認識しており〈平穏な気持ち〉が得られていた 2) 同居をはじめた次男家族と多くの同級生の交流から〈家族・友人の支え〉をもたらしく〈平穏な気持ち〉につながっていた 3) 地域、友人、家族との穏やかな関係性は、〈周囲への思いやり〉の姿勢から築かれ、今後も変わらない〈関係性の維持〉を願っていた 4) 亡き配偶者の仏壇や日常に語りかけており、〈時空間を越えた語り〉としてあの世の世界をつないでいた	中心概念3: 【言語や態度で語ることで、意味や目的を確認し方向性を見出していた】	【言語で語ることで、関係性や意味を確認している】
合計		16回 1,420分	89 本質	〈本質〉28 と 命題 16	【中心概念】 3 【カテゴリー】 3	

「おら家にいればな、まずすぐに外さ出で畑のことばかり考えている…山の方さ見てさ、今の時期はな、山菜何か出てるってことすぐに思い出すからや、行きたいなって思うけど…本当にいいよ…きれいだよ」
〈自然環境の美しい故郷〉「どうあってもな、早く家さ帰りたいとばかり思ったんだ。こんな身体だけど何か出来ることがあるんだ。何でもいから農家の仕事をしたい。〈役割存続への意志〉」

〈病気の再発〉で思うように動けない自分の身体に落胆していたA氏は、勧められて始めた通所介護サービスも、最初は「幼稚園みたいだ。馬鹿げている」と消極的だったが、そこで出会った〈百歳高齢者との交流〉から、〈強い気持ち〉を見出していた。また、一家の主として若い時から方々出稼ぎで働いてきた経験から、〈自然環境の美しい故郷〉への親しみが語られ、今も現役で農家の仕事をしていたA氏は、何度も働くことへの〈役割存続への意志〉を語っていた。

B氏：「B先生という方との出会いが私の出発点でございます。現実のお寺さんとの接触は、全く宗教に関することとは別な世界でお住まいになっているし、本来の宗教ではないんではないかというさめた気持ちがございます…〈宗教家との出会い〉」

「宗教の世界では理解を超えるんですね。全部超えますね。(お寺へ行ったり、お経を読むこととは)全く私の中にはもっていません。」〈観念的な宗教〉「今も変わらずそのまま…心の中にその時の思いがずっと生きています。会うことのない今となっては、本当に…心の支えです。〈心の支え〉」

「誰でも老いれば精神も肉体も衰えます。それを私としてどう受け入れるかという問題があるわけです。〈老化による身体の衰え〉私には宗教の世界がありますので迷いませんが、観念的な世界ではなく…屈辱という受けとめではなく…そういう衰えを自分の世界でどういうふうな受けとめて生活したらいいかという問題を考えています。そういうことを越えてね、生きるっていうこと、死ぬっていうことについて心の準備が必要になったのだと思います。〈現実的な自己受容〉」

20年前の恩師である〈宗教家との出会い〉をきっかけに、宗教への深い信仰を抱くようになったB氏は、宗教は儀式や形式的なものではなく〈観念的な宗教〉にとらえ、今も揺るぎない〈心の支え〉と認識していた。また、現実的に生じている〈老化による身体の衰え〉や終焉について、どのように〈現実的な自己受容〉をしていくかが「今の一番の課題」と語った。

C氏：「辛い時は、いつも星の光を見た。朝まで見て泣いたこともあったよ」「明日はね、また今日がスタートだと思えば、そしたら毎日お空の星眺められるの〈星の輝き〉。とにかくね、今日をスタートにすれば今日が一番若い日となるの(笑)。ああ…、後ろばかり振り向いては駄目だってね、今日は絶対に前を向くぞって、そういうふうな気持ちを切り替えれば、絶対にお空にお星様が出てくるの。〈明日への希望〉」

「53年間全部1人でやってきた。家の事、仕事も、金とか一切私だけでやってきた。本当に頑張ったよ。辛かったけどね〈苦難な貧困生活〉、その生活があったから今の幸せがあると思ってるの。」「私はお金で買えないものを得たと思っている。家のたんすの中にはお金で買えないものがいっぱい眠っているの。それを引っ張り出してね、今は感謝しているのよ〈掛け替えのない宝物〉。それは家族の幸せかな。幸せは決してお金では買えないの。どこにも売ってないんだから、本当に宝物だよ。〈家族の絆〉」

菓子屋の経営から余儀なく義父の借金を負い〈苦難な貧困生活〉を強いられたC氏は、毎晩〈星の輝き〉を眺め、〈明日への希望〉を見出してきたことが語られた。また度重なる苦難生活を自分が家族の中心となって乗り越えてきた体験をとおして、強い〈家族の絆〉が得られ、それを〈掛け替えのない宝もの〉と認識していた。

D氏：「リハビリは余りしなかったけれど、主人に毎日散歩に連れて歩かれたの。私少しでも良くなったのは、主人のおかげだし楽しかったね。本当にいろんなとこ歩いた。その主人も3年前に亡くなった…ここで、私の腕の中で息絶えたの。ここに座っていて何か変だになって抱き起こしたの。そしたら、す〜っとなって顔色もおかしいし…そして、いっちゃったの。だから…一生懸命ね、今までどうもありがとうね。愛しているわよってね。うーんと語りかけたの。だって、人間息絶えてから15分くらい耳聞こえるって聞いたことあったから〈亡き配偶者の存在〉」

「霊にどこかで会えるよっていわれて、…旦那に会いたいと思って行ってきたの。友達と“来たよー出てきなさい”って叫んだけど、そういう雰囲気全然なかった。(そのこと次男に話したら)“当たり前だよ。父さん、そっちに行かないで、ここにいるんだから”って言われて、“ああ、そうだった。父さんここにいたんだ”って思ったの。本当、いつもそばにいるのね〈いつもそばにいる存在〉。ほら…あそこ…変わらない

…全然亡くなったっていう感じがしないの。〈平穏な気持ち〉」

「私は、やっぱりお友達がいっぱいいるからだね。だから悲しみも、そのお友達によって、癒されているのかな。」「あと家族だね。私一人になってしまったのね。なんとなくがっかりしてたら、孫から電話かかってきて“明日から私達行って泊まるからね”って…わっつと喜んだの。本当に皆に支えられて…幸せだね私…〈家族・友人の支え〉」

3年前に夫を亡くしたが、D氏の居間には夫の写真や遺品がそのまま飾られており、「全然変わらない」と語った穏やかな表情や態度から〈亡き配偶者の存在〉は、〈いつもそばにいる存在〉として認識し、多くの〈友人・家族の支え〉を受けながら〈平穏な気持ち〉を維持していた。

参加者が関係性を築き意味を見出していた対象の、〈自然環境の美しい故郷〉〈観念的な宗教〉〈星の輝き〉〈亡き配偶者の存在〉は、自然や観念的世界を意味する《自分を超えた大きな存在》として、〈百歳高齢者との交流〉〈宗教家との出会い〉〈家族の絆〉〈家族・友人の支え〉は、家族や友人・コミュニティなどを意味する《他者の存在》の対象領域としてまとめられた。また参加者が《自分を超えた大きな存在》との関係から見出していた、〈役割存続への意志〉〈心の支え〉〈明日への希望〉〈いつもそばにいる存在〉や、《他者の存在》との関係から見出していた〈強い気持ちで生きる〉〈現実的な自己受容〉〈掛け替えのない宝もの〉〈平穏な気持ち〉は、参加者自身の心の内を意味する《自己の内面》としてまとめられた。

2) 中心概念2：【生き方から築いた力を働かせ、意味や目的に向かって進もうとしていた】

参加者は、それぞれ対象との関係から《自己の内面》に新たな意味や目的を見出し、それに向かって進んでいこうとしていた。また、この時に自分の過去の人生経験から築いた、志向性や信念、価値感など生き方に関連した確かな力のようなものを働かせていた。

A氏：「何か絶対やれる、それはやっぱり自分で探さなくちゃ駄目だと思ってます。やってみたら出来ないかもわかんないけれど、それをなんとかしてね、やれるように私なりたいたいです。やっていきたいと思ってます。」「何かあると思うんだよ。自分でやっぱりなこういう半身不随になっても、やれることを見つけて自分で探してやれることが、やっぱり一番大事だなと思えますよ。やれるんだ。いつかはって自分では思っ

てますよ。〈出来るという希望〉」

「一つでも努力しなければだめだと思うのさ。何かやろうという気持ち持たなければ。やるぞと思えばな、何でもできるんだ。出来ない事はないのさ。いままでもそう思って、何でもやってきたんだ。やっぱりやらねばならねえと思ってやればな、そんな苦勞はないもんなんだよ。」「やっぱりやると思う気持ちが大事。その決意が一番大事なんだ。何か確かにやれるって思うと出来るんだ。〈強い決意〉」

A氏は、サービスで出会った〈百歳高齢者との交流〉から〈強い気持ちで生きる〉思いが生じ、そこからいつか自分も〈出来るという希望〉を見出していた。このとき、これまでの生き方から築いた〈強い決意〉を働かせ、前へ進もうとしていた。

B氏：「自分の身に問う生活のスタイルを持っている方は、極めて少ないと思うんです。自分の生き方について立派な言い方をすれば、自己実現になるのかな？自分はどのような人間になりたいという自分に対する問いかけ…常に自分に問いながら生きていきたい。〈自己実現への問い〉」

「自分について問うということは、善い事も悪い事も認めることです。自分の予測が出来ない死ではあるけれども、最期まで…こういう気持ちで（ありがとうの言葉を指差して）…終えたいです。〈感謝の気持ち〉」

〈老化による身体の衰え〉や死に対し、どのように〈現実的な自己受容〉をしていくかを今の課題としていたB氏は、常に〈自己実現への問い〉を遂行しながら、〈感謝の気持ち〉を持ち続けて生きていきたいと語った。

C氏：「私はこの家で、つくづく必要とされている人間なんだって…それは本当に幸せだね。だってね、いたれりつくせりは絶対に本当の老人の幸せでないから。若い人たちが全部やってね、年寄りが全然家族の輪に入らないで外の方でいてね，“ああ…おばあさん、私たちやるからいいから”って言うくらい、年寄りにとって生きがいのないことないよ。」「なんぼこうやって手が不自由だ、足が不自由だって言ったってね、この家族で、この家庭でね、本当に必要とされているんだって、そう思う立場にいること自体が本当に幸せなの。〈家族の役割意識〉」

「後ろを振り返らないで昨日のことは忘れて、とにかく今日がスタート。昨日より今日は何かいいいこと…。今日が一番若い日だとそう思ってね、スタートするのね。だけど、ああ、これではわかんないってね、後

ろばかり振り向いていては駄目だってね、今日は絶対に前を向くぞって、そういうふうな気持ちを切り替えれば、絶対にお空にお星様が出てくるの。〈前向きな志向性〉」

〈苦難な貧困生活〉を家族の中心となって乗り越えてきたC氏は、身体の不自由を感じながらも〈家族の役割意識〉をもって生きることへの幸せを実感していた。そこには、C氏がこれまで多難を乗り越えてきた体験から築いた〈前向きな志向性〉が備わっていた。D氏：「やっぱり家族だね。とつてもよくしてくれるから。それから友達。お友達がいっぱいいるからだね。だから悲しみも、そのお友達によって、癒されているのかな。」「隣とも仲良しだし、こっちとも仲良しだから、ガラス越しにでも草とつてると、“ああ、おはよう”って声掛けたりして。本当にいい人たちばかりに支えられて幸せだね。」「今までどおり…このまま生活が長く…穏やかに続けばいいなって思う。〈関係性の維持〉」

「私のきょうだい複雑なの。母は私を生んで離婚したの。何かうちのこと言うとか変だけどね、私たちは8人の親につかえたの。お父さんの方も4人いるの。両方そういう思いをしてきたの。」「同級生の人たちは、ここが落ち着くって言うのね。みんな寂しい思いをしているんだっけよ。だから…ここに来て話すのうんと楽しみなんだっけ。〈周囲への思いやり〉」

複雑な環境に育ち亡夫とともに8人の親を看取ってきたD氏は、多くの家族や同級生・近所の友達に支えられ、その変わらない〈関係性の維持〉を願っていた。そこには、常にD氏の〈周囲への思いやり〉があり、それが周囲からも見守られているという相互関係を築いていた。

参加者が示した〈出来るという希望〉〈自己実現への問い〉〈家族の役割意識〉〈関係性の維持〉は、対象との関係性の模索から《自己の内面》に再構成、あるいは再確認された意味や目的と理解された。そして、これらに向かって進もうとする動きがあり、このとき参加者が自己の人生経験から築いた〈強い決意〉〈感謝の気持ち〉〈前向きな志向性〉〈周囲への思いやり〉が、動かす原動力となって働いていた。

3) 中心概念3：【言語や態度で語ることで、意味や目的を確認し方向性を見出していた】

A氏：「おばあさんたちと何だりかんだり冗談交えて話すのね、これもいいことかなって思っています。まだ学校さ歩いてたときの話をしたり、様々やっぱ

り楽しいね。本当に。やっぱりそういう人とつき合っ
て、相手さ通用していくには話し合うことが一番肝心
だなと思ってます。」「こうやって来てもらって話をす
るのが、元気が出るんだ。こんなふうに話をするのが
いいんだ。本に（本当に）ありがたい。〈語り合いが
心を繋ぐ〉」

ディサービスに通い始めた当初は「幼稚園みたいだ」
と参加に消極的だったA氏であったが、参加者との
〈語り合いが心を繋ぐ〉と考えていた。

B氏：「朝起きてから寝るまでおばあさんに世話にな
っている訳で…そういうおばあさんには、私の気持
ちは全くわかってもらえない。」「全部を表に出してその
上で相手の立場を尊重し、話をするということがいい
と思うんですよ。あなたは信頼できる人だと受け取っ
ていますので、私のところで壁をつくらないことが最
も大切だと思うから。あなたの場合真剣に物事を考え
ている方だから、むしろ時間をかけて話し合いたい
と思います。あなたのような基盤を一緒に出来る人に
会えて本当にうれしい。（泣く）〈理解者と語り合うよ
ろこび〉」

常に妻の介護を受けながら生活をするB氏は、妻は
自分の本当の気持ちを話せる存在ではなく、自分を理
解してくれる存在を求めていた。今回の研究者に語る
対話の時間が〈理解者と語り合うよろこび〉として感
じていた。

C氏：「だけども後ろを振り向きたくなくなるのね。そ
ういう時は思いっきり泣いて誰かに愚痴って話すの。そ
したらまた元気になれる。」「息子が帰るまで1人でし
ょう？だからディサービスとか病院とかね、集金もわ
ざと振込みにしないで毎日誰かと話すようにしている
の…私ね、こうやってお話しすることは、頭のリハビリ
だと思ってるの。おしゃべりと笑いは健康のバロメ
ーターよ。〈笑いと言語が健康をつくる〉」

毎日誰かと話し笑うように生活を工夫していると語
ったC氏にとって、〈笑いと言語が健康をつくる〉と
考えていた。

D氏：「いつも（夫に）語りかけているの。返事はな
いけど…（笑）。寝るときも、そっちには（部屋を指
差して）お仏壇が在るんだけどもしばらく話しかけて
から寝るの。“今日こういうことあったよ。ああだっ
たよ”って。テレビの話とかなんでも。安心するね。
〈時空間を超えた語り〉」

D氏が亡き配偶者の仏壇や日常（亡夫への）語りか
けることは、あの世との〈時空間を超えた語り〉とな

って亡き夫との繋がりを確認することで〈平穏な気持
ち〉が得られていた。

参加者全員が、身近な他者や存在に言葉や態度で語
ることに意義を感じていた。参加者が示した〈語り合
いが心を繋ぐ〉〈理解者と語り合うよろこび〉〈笑い
と言語が健康をつくる〉〈時空間を超えた語り〉は、そ
れぞれのかたちで自分の存在を確認する手段と考えて
いた。

3. 発見的解釈の結果

統合された3つの中心概念を、人間生成の3つの原
理とその構造に照らし、それぞれを構成する下位概念
への転換を行った。その結果、【中心概念1】は、第
2原理「関係性」を構成する下位概念「結合的一分離
的」、【中心概念2】は、第3原理「超越性」を構成す
る下位概念「力を与える」、【中心概念3】は、第1原
理「意味の構成」を構成する下位概念「言語化する」
にそれぞれ転換することができた。そして、これらを
人間生成の理論枠組みに沿って統合した結果、高齢者
のスピリチュアリティの体験は「言語化することによ
って多次的に意味を構成し、結合的一分離的なリズ
ミカルな関係づくりのパターンを共に創造しながら、
力を与えることで可能性をもって共に超越しながら生
きること」と解釈できた。

次に、これらの発見的解釈の結果をふまえ、参加者
との対話の記述から抽出された本質の意味と関係性を
探りながら、体験の中心的なテーマとなるものを導き
出し〔 〕に記した。その結果【中心概念1-3】
は、統合された本質と転換された人間生成の原理を構
成する下位概念の意味から、それぞれ〔テーマ1：あ
る対象につながりを求め、その関係性から意味を構成
する〕〔テーマ2：生き方から築いた力を働かせ、意
味や目的に向かって進もうとしている〕〔テーマ3：
言語で語ることで、関係性や意味を確認している〕
が導き出された。

そしてテーマ1と3は、多様な対象との関係性にお
いて、次元を超えて多次的に模索しながら意味を探
求する垂直的構造を示し、テーマ2は、見出された意
味や目的にむかって時間とともに未来へ進もうとする
水平的構造を示しており、前者を「模索的探求過程」
後者を「動的探求過程」と命名した（図1）。

考察

1. 対象との関係性を模索し意味を構成する過程

人間生成理論では、人間は体験に意味を与えながら

現実を共に構成して生きており、それは連続的・逆説的なリズムカルなパターンを描いていると解釈する。「逆説的」とは、対立ではなく一方は表面に他方は背面にあるというように同時に存在する2つのリズムの側面を意味している。本研究の参加者も、病気や老化による身体の衰え、家族との死別などの喪失を体験しながら、一方では別な対象とのつながりを求め、分離と結合の両側面を同時に体験しながら意味を探索する姿が解釈された。

国内外の多くのスピリチュアリティに関する先行研究が、結合 (connectedness) や関係 (relationship) は、スピリチュアリティ概念の中心的な構成概念と述べており²⁴⁾、本研究で示された3つの対象領域《自分を越えた大きな存在》《他者の存在》《自己の内面》も、これらの知見を支持するものであった。しかし、結合と分離の逆説性を同時に体験しているというこの同時性の見方は、人間生成独自の見方であり、高齢者が、老化や疾患にともなう身体機能の衰退、社会的役割の喪失、経済基盤の揺らぎ、親しい人との死別、居住環境の変化など、多くの分離を伴う体験を複合的・不可避的に遭遇する中で、一方ではまた多くの事物や

対象とのつながりが生じていると解釈することができる。後期高齢者の場合、それは全く新しい形としてあるのではなく、〈掛け替えのない宝もの〉〈強い気持ちで生きる〉などと、これまでの人生から築いた対象との関係性をより強く再確認することで、揺るぎない意味や目的を確信するものであったと考えられる。こうした同時性の見方は、高齢者の生き方を多面的にとらえ、スピリチュアリティを支える連続的ケアを実践する上で重要な視点となる。

高齢者は、特に対象領域の《自分を越えた大きな存在》との関係が重視される²⁵⁾が、一神教をもたない文化、風習、歴史的な特性にある日本人は、現前する山川草木などの自然そのものを大いなる神のような存在として重んじる傾向にあるといわれる²⁶⁾。本研究の参加者も〈自然環境の美しい故郷〉や〈星の輝き〉が、大いなる宇宙や自然を意味する存在として認識していたものとする。また、高齢者のスピリチュアリティに対する意識は、宗教とは別に認識しながら長い人生経験から現実的・具体的に意識化する傾向にあり²⁷⁾、後期高齢者は自らの死にむかうことへの態度が重要で、これは発達課題である人生の統合に大きく影響すると

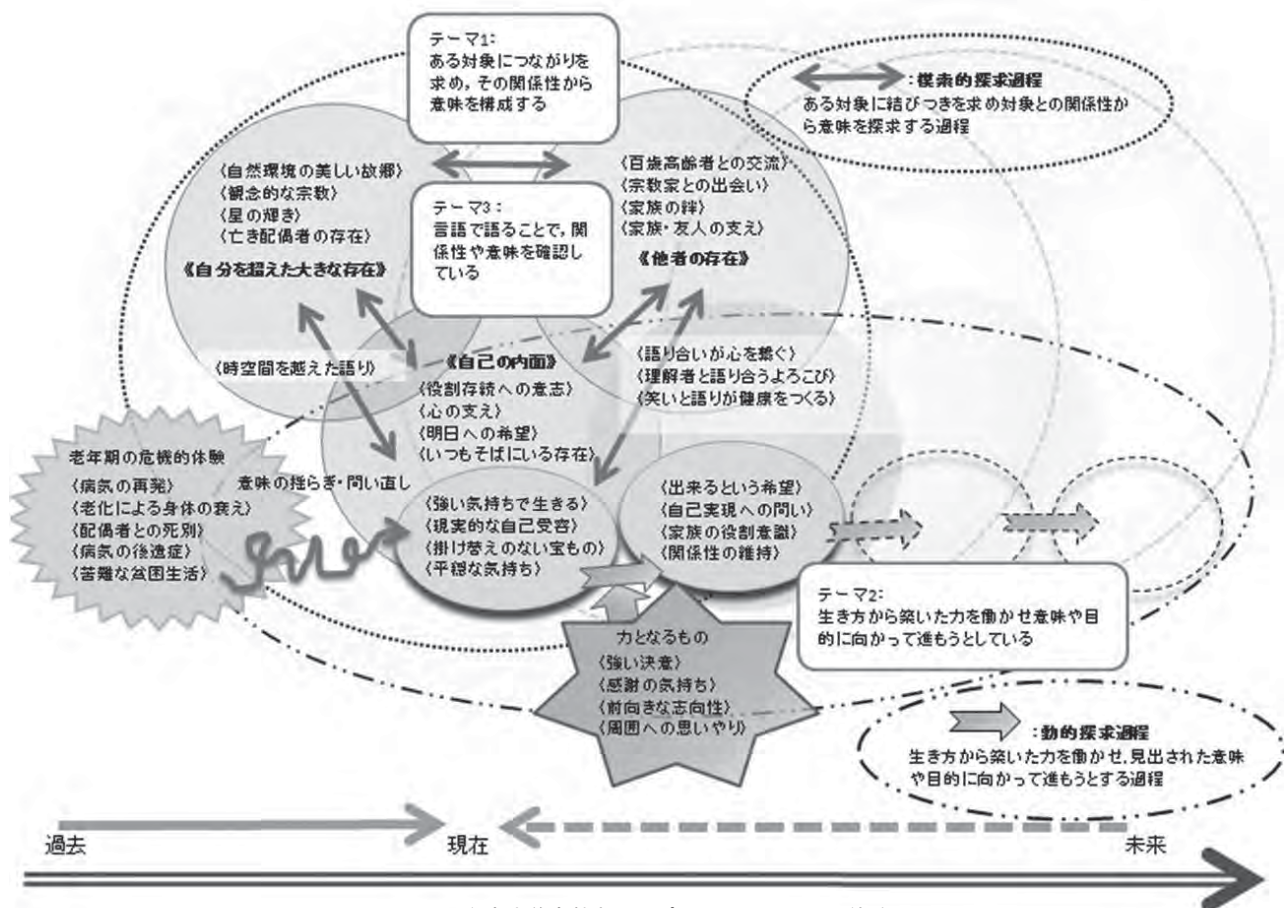


図1. 在宅療養高齢者のスピリチュアリティの体験

報告されている^{28) -29)}。本研究の参加者からも、〈亡き配偶者の存在〉を〈いつもそばにいる存在〉と認識し、また、死に対しては観念的なとらえではなく〈現実的な自己受容〉のあり方を模索する姿が示された。こうした高齢者の姿は、あの世の世界を遠い分離した世界としてではなく、自らの終焉を見据え現世の延長にある世界として認識することで、人生の統合という課題に向き合う姿であったと推察された。

2. 言語化することで意味を構成する

Parse³⁰⁾は、意味の構成について、一挙に多くの領域で体験していることに意味を与えることによって絶えず現実を共に創造することであり、現実とは、過去と未来がその人の歴史を超えて非時間的に多次元的な体験と共に多くの選択肢が具体化されることであると述べている。参加者の後期高齢者は、言語化の過程をとおして過去・現在・未来の時間や場所を超えて、一挙に自らの長大な人生体験を多次元的に具現化することで、主体的に意味を与えていたと解釈できた。言語化の過程は、単に言葉で話す内容やその行為を示すのではなく、どのように全体のメッセージがその状況の前後関係の中に明らかにされているかということで、象徴的な表現を構成している語れないことやつくれない瞬間をも意味している³¹⁾。参加者全員が、他者との語りにも意義を感じていた。それは、家族や妻など生活を共にする身近な存在への語りというよりは、同じ立場にあるディサービス仲間や人生語りの意図的な対話場面の研究者との語りについて、〈語り合いが心を繋ぐ〉〈理解者と語り合うよろこび〉と示していた。また、亡き配偶者への語りも〈時空間を超えた語り〉となっており、あの世との世界をつないでいたり、あるいは語りが笑いとともに健康をつくる一要因とも示された。以上のことから、後期高齢者が他者に言語化する過程は、単に相互的な意思疎通を図る手段としてのみあるのではなく、これまでの自らの長大な過去の体験や未来につながる不確実性が時間・空間を超えて多次元的に具体化する機能となっていたと考えられた。

高齢者の語りについては、危機的転機を含む長大な過去の経験を組織化することによって諸経験を意味づけ、自己の連続性を保持し、自我同一性を維持・再構築していくための一装置といわれ³²⁾、ケアとしてのナラティブ・アプローチ法の有用性が多く報告³³⁾されている。今回の在宅療養高齢者は、長年慣れ親しんだ自宅で生活していたことで、直接自己の創作物や事物にふれられる環境にあり、これまでの歴史や文化的背景

から体験を想起・具現化しやすく、自己の存在意義や目的を再確認しやすい状況にあったと推察された。そして、後期高齢者が示していた周囲との変わらない〈関係性の維持〉や農家の仕事という〈役割存続への希望〉は、度重なる病気や老化が原因で生活の場を余儀なく病院へと変化を強いられてきた体験の中で、これまで築いてきた生活維持・存続への願いであったと考えられる。

3. 力を働かせ進んでいこうとする過程

Parseは、力を与えることについて推進的-反発的な過程と定義し、推進的-反発的は、緊張や葛藤とともに新しい可能性に達成しようと努力しながら進む変容の過程の中に存在し、人間は見えない未来へ向かって進む存在ゆえに力を与えることは人間存在の根源である³⁴⁾と述べている。参加者の後期高齢者は、病気や老化、家族との死別といった喪失体験に直面し、これまでの意味や目的に揺らぎを感じながら、その一方では別な対象との結びつきを模索し意味・目的の再構成を図っていた。まさにこの過程は、人間は与えられた現実ではなく、主体的に具体化された自らの体験に意味を与え、絶えずその時々を意味を上げ構成しながら究極的な意味へとつなげ生きていこうとする姿で、スピリチュアリティが高まる過程であったと考えられた。そしてこのとき、高齢者は自己の生き方から築いた力を働かせ、意味や目的に向かって進もうとしていた。この力の様相は、それぞれの人生経験から築いた信念や価値観などに基づき、〈強い決意〉〈感謝の気持ち〉〈前向きな志向性〉〈周囲への思いやり〉と個々異なっていたが、そこには強さと自信が備わりそれ故の未来に通じる確信性が感じられた。

高橋ら³⁵⁾は、高齢者は年齢とともに、人生のなかで経験した多くの苦勞、苦痛、または生きることのパラドックスを通じ、自らの存在目的や人生の意味を見つめてきたという経緯からスピリチュアリティをより具体的な日常概念でとらえる傾向にあり、人生経験の豊かさから未来への確信が強まり、スピリチュアリティも高まる傾向にあると報告している。今回の後期高齢者が示した力にも、長大かつ多難な人生経験を乗り越えてきた所以の強さと確信性を備えおり、未来へ向かって進んでいくための確かな起動力となっていたと推察された。

4. 看護への示唆

後期高齢者のスピリチュアリティの体験の意味には、ある対象との関係性を模索しながら意味を探求する

「模索的探求過程」と、見出された意味や目的にむかって自らの生き方から築いた力を働かせ進もうとする「動的探求過程」があり、この二つの過程を理解した看護ケアの必要性が示された。関係性を求める対象領域は大きく《自分を越えた大きな存在》《他者の存在》《自己の内面》の3つにまとめられ、特に後期高齢者は《自分を越えた大きな存在》を具体的・現実的に認識することから、その関係性において自らの死をも受け入れ人生の統合という発達課題に向き合えるよう支援していくことの重要性が示唆された。

そのアプローチ法の1つに、高齢者が他者に語ることで体験が多次的に具現化され、そこから自己の生き方を意味づけ再確認・再構築していたと解釈された。後期高齢者が自らの生き方について、他者と語りあえる環境づくりの重要性が示唆された。しかし今回の参加者は、自宅という慣れ親しんだ生活の場でケアを受けている在宅療養者であり、いつでも生きてきた証や事物に直接ふれられる環境にあったことや、病気や老化による身体症状が慢性期と比較的落ち着いていたこと、配偶者の死別体験から3年と時間が経過していたことから、既にスピリチュアル・ペインとしての認識ではなく言語化しやすい時期にあったと考えられる。一概に語りといっても相互意思疎通の機能だけでなく、亡夫との存在を繋ぐ〈時空間を超えた語り〉や健康づくりの一要因としての機能も担っていたことから、後期高齢者の語りには多様な機能を包含している可能性が示唆された。

研究の限界

人間生成理論の研究方法論を用いた国内の文献は見当たらず海外文献のみを参考にしたこと、本研究の参加者が4名と少なかったことから、得られた知見の一般化には限界がある。しかし先行研究では、面接回数は1回であったが、本研究では1名に3～5回行ったことで、参加者の主体的な表現に基づく相互理解が得られ、データの信頼性は担保されたと考える。今後は、病期やケアの場を変えたり、実証的側面からも高齢者のスピリチュアリティを支える看護援助について検討を重ねていきたい。

結論

- 1) 在宅療養高齢者が言語化する過程は、自らの長大な体験を具現化することで意味の再構成・再確認する場となっており、すなわち、「語り」がスピリ

チュアリティを高めるケアとなる可能性が示唆された。

- 2) 後期高齢者は、ある対象との関係性において人生の意味を構成していたが、特に《自分を越えた大きな存在》との関係において、自らの終焉をも含め現実的・具体的にとらえることで、人生の統合という発達課題に向き合っていたと解釈された。
- 3) 在宅療養高齢者は、慣れた親しんだ自宅の生活環境で、自らの長大かつ多難な人生を乗り越えてきた所以の強さと確信性を備えた「力」を働かせ、生きる意味や目的にむかって前へ進もうとしていた。
- 4) 高齢者のスピリチュアリティの体験の意味には、対象との関係性から意味を構成する「模索的探求過程」と、意味や目的にむかって進もうとする「動的探求過程」の2つの過程が見出され、この2つの過程を理解した看護ケアの重要性が示唆された。

謝辞

面接にご協力いただきました対象者の皆さま、ご家族の皆さまに深く感謝を申し上げます。本研究は、岩手県立大学大学院看護学研究科における修士論文の一部を加筆・修正したものである。本研究の一部は、日本老年看護学会第11回学術集会（2006年、東京）で報告した。

引用文献

- 1) 共生社会政策統括官. 平成24年版高齢社会白書 第1章高齢化の状況. 内閣府：2012年6月15日.
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2012/zenbun/pdf/1s1s_1.pdf.
- 2) 社会保障審議会後期高齢者医療の在り方に関する特別部会. 後期高齢者医療の在り方に関する基本的考え方. 厚生労働省：2007年4月11日.
<http://www.mhlw.go.jp/public/bosyuu/iken/dl/p0411-1a.pdf>
- 3) 竹田恵子. 看護学からみた高齢者への健康生活の支援-人生の最終章を生きる高齢者への看護-. 川崎医療福祉学会誌 2010；増刊号：45-55.
- 4) Blazer, D.. Spirituality and Aging well. Generation 1991；15（1）：61-66.
- 5) 前掲書3)
- 6) WHO. technical report series Cancer pain

- relief and palliative care, 1990. 世界保健機構編. がんの痛みからの解放とパリアティブ・ケア-がん患者の生命へのよき支援のために-. 武田文和訳. 東京:金原出版;1993. 5-6.
- 7) 窪寺俊之. スピリチュアルケア学序説. 第1版. 東京:三輪書店;2004.
- 8) 小楠範子. 語りにみる入院高齢者のスピリチュアルニーズ. 日本看護科学会誌 2004;24(2):71-79.
- 9) 竹田恵子, 太湯妙子. 日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討 川崎医療福祉学会誌 2006;16(1):53-66.
- 10) 石井八重子. World Health Organization (WHO)を中心とした健康関連に関するQuality of Life (QOL)・スピリチュアリティ研究活動の概要 東京医療保健大学紀要 2005;1:45-55.
- 11) Rosemarie Rizzo Parse. The Human Becoming School of Thought: A Perspective for Nurses and Other Health Professionals 1998/高橋照子監訳. パーシィ看護理論:人間生成の現象学的探求. 東京:医学書院;2004.
- 12) Parse. R. R. Qualitative Inquiry The Path of Sciencing. USA:National League for Nursing; 2001.
- 13) Parse R. R.. Quality of life;Sciencing and living the art of human becoming Nursing Science Quarterly 1994;7(1):16-21.
- 14) 高橋照子. 人間科学としての看護学序説看護への現象学的アプローチ. 東京:医学書院;1990.
- 15) Fawcett, J.. Analysis and Evaluation of Nursing Theories;1993/太田喜久子, 筒井真優美監訳. フォーセット看護理論の分析と評価. 新訂版. 東京:医学書院;2008.
- 16) Young, A., et al.. Connections: Nursing Research, Theory and Practice. USA :Mosby 2001:163-169.
- 17) 前掲書11)
- 18) Martoslf ,D. S..The concept of spirituality in nursing theories differing world-views and extend of focus. Journal of Advanced Nursing 1998;27:294-303.
- 19) 前掲書11)
- 20) 青木信雄. 高齢者を対象とした“たましいのケア”のわく組.ホスピスと在宅ケア 2004;12(1):29-32.
- 21) Anthony, J, Welch. The Phenomenon of taking life Day-by-Day:Using Parse's Research Method. Nursing Science Quarterly 2007;20(4):265-272.
- 22) Parse. R. R. The Human Becoming school of Thought A Perspective for Nurses and Other Health Professionals. USA:SAGE Publications;1998.
- 23) Holloway, I, Wheeler, S.. Qualitative Research foe Nurses. Blackwell Science. USA: Malden;1996. 野口美和子監訳. ナースのための質的研究入門研究方法から論文作成まで第2版. 医学書院;2006.
- 24) Chiu, L, Emblem, J, Hofwegen, L. et al .An I ntegrative Review of the Concept of Spirituality in the Health Sciences. Western Journal of Nursing Research 2004;26(4):405-428.
- 25) 竹田恵子, 太湯妙子, 桐野匡史, 中嶋和夫, 高井研一. 高齢者のスピリチュアリティの特徴. 第40回日本看護学会論文集 老年看護 2010;40:96-98.
- 26) 前掲書8)
- 27) 高橋正美, 井出訓. スピリチュアリティの意味-若・中・高齢者3世代比較による霊性・精神性についての分析-老年社会学 2004;26(3):296-307.
- 28) 前掲書22)
- 29) 三澤久恵, 新野直明. 高齢者のスピリチュアリティ概念生成の試み インタビューによる高齢者の「生きる」ことの意味の探求から. 第40回日本看護学会論文集 老年看護 2008;38:111-113.
- 30) 前掲書11)
- 31) 前掲書14)
- 32) 野村晴夫. 高齢者の自己語りと自我同一性との関連-語りの構造的整合・一貫性に着目して-. 教育心理学研究 2005;50:355-366.
- 33) やまだようこ. 老年期にライフストーリーを語る意味. 老年看護学 2008;12(2):10-15.
- 34) 前掲書11)
- 35) 前掲書27)

(2012年10月4日受付, 2013年2月22日受理)

<Original Article>

The Experience of Spirituality of the Elderly in Homecare

Miyoko Suzuki

Iwate Prefectural University, Faculty of Nursing

Abstract

The purpose of this study was to describe the experience of spirituality of the elderly in homecare and to clarify the meaning and the structure of these experiences. Unstructured interviews were conducted with participants who were four elderly people over 75 years in homecare, and the data was analyzed by a qualitative method based on a Parse's theory of human becoming.

As the result, the following three main themes were identified as the essential meanings of the spirituality of the elderly in homecare: [Searching to connect some subject and signify the meaning from their relation] [Trying to move toward the aim or meaning with the force that have based on own life] [Confirming to the meaning or relation by telling with language]. From these main themes, the elderly in homecare have reconstructed the meaning by embodying own experience through the languaging. I was considered that there are two processes as the meaning of the experience spirituality of the elderly. The first is "Exploring process". It is the process of exploring the meaning from between the subjects, I could interpret that they were aiming to achieve the developmental tasks of integration of life, especially in relation to the transcendent existence. The second is "Dynamic Process". It is the process of moving forward to the meaning and purpose which had been found from the relationship between the subjects. Further in this process, the elderly in homecare were using a strong power that had been built from own long life in the familiar living environment. These results suggest that nursing care was important to understand the two exploring processes.

Key words : elderly in homecare, spirituality, Parse's human becoming theory, people over 75 years